

イエス・キリストの黙示 - 第八

国家の誕生

Jeff Pippenger

2023-10-31

初めの真夜中の叫びのメッセージは調査審判の開始で終わり、真夜中の叫びのメッセージは執行審判の開始で終わる。イスラムの第三のわざわいは、日曜法の可決に対してアメリカ合衆国に裁きをもたらすとともに、ツロの淫婦イゼベルと姦淫を犯した十人の王に代表される世俗の迫害権力の圧力の下で各国がそれぞれの日曜法を受け入れたことに対して、全世界に対する継続的かつ激化していく裁きをも表している。

「宗教の自由の地であるアメリカが、良心に強制を加え、偽りの安息日を尊ぶことを人々に強いる点で教皇制と手を結ぶようになると、地球上のあらゆる国の民はその手本に倣うよう導かれるであろう。」 Testimonies, 第6巻、18.

そのとき、大争闘における日曜法をめぐる戦いは本格化する。その後、サタンがキリストを装って現れる。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けると、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」 『証言』 第5巻、451頁。

国家的背教に続くのは国家の破滅である。

アメリカ合衆国の民はこれまで恵まれた民であった。しかし、彼らが宗教の自由を制限し、プロテスタント主義を放棄し、教皇主義を容認するとき、彼らの罪は満ち、『国家的背教』が天の書物に記録されるであろう。この背教の結果は国家的破滅となる。 Review and Herald, 1893年5月2日。

愚かなラオデキヤのアドベンチストたちは教皇権と手を組み、打ち倒される一方で、なおバビロンにいるキリストの他の群れは教皇権の手から逃れる。

彼はまた美しい地に侵入し、多くの国々が打ち倒される。しかし、エドムとモアブ、そしてアンモンの子らの主だった者たちは、彼の手から逃れる。ダニエル書 11:41

第七のラッパが日曜法の可決に対する審判の災いをもたらす中で、イスラムが突然アメリカ合衆国を襲う。

そして私は見た。また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた。「災いだ、災いだ、災いだ。地に住む者たちに、これから吹き鳴らされる三人の天使のラッパの残りの響きのゆえに！」 黙示録 8章13節。

黙示録第十一章で二人の証人を表す旗印は、黙示録第十二章でヨハネによって太陽を身にまとう女として描かれ、さらに始まりと終わりの象徴によって預言的に示されている。

そして、天に大いなるしるしが現れた。太陽を身にまとい、足の下には月があり、頭には十二の星の冠をかぶっている一人の女がいた。彼女は身ごもっており、産みの苦しみのあまり叫び、出産の痛みにあえいでいた。さらに、天にもう一つのしるしが現れた。見よ、大きな赤い龍で、七つの頭と十本の角があり、その頭には七つの冠があった。その尾は天の星の三分の一を引き寄せ、地に投げ落とした。そして龍は、産もうとしている女の前に立ち、彼女が子を産むやいなやその子を食らおうとしていた。女は男の子を産んだ。その子は鉄の杖をもってすべての国々を治めるように定められており、彼女の子は神のもと、神の御座へと引き上げられた。黙示録 12:1-5

彼女は月の上に立ち、太陽を身にまもっている。月は太陽の光を反射するものであり、ゆえに預言的には太陽を象徴する。彼女の冠の十二の星は、古代イスラエルの初めにおける十二部族を表しており、その十二部族は古代イスラエルの終わりにおける十二弟子をかたどっている。古代イスラエルの終わりに十二弟子を表す十二の星は、現代イスラエルの初めには十二使徒でもある。したがって彼らは、現代イスラエルの終わりにおいて弟子であり使徒である十四万四千を象徴する。弟子たちが古代イスラエルの終わりを、また使徒たちが現代イスラエルの始まりを表しているその歴史の初めに、教会である女はキリストを身ごもっていた。彼は、死と復活の後に神のもとに引き上げられる「男の子」である。

したがって、その女は、死の谷から復活したのちに天に昇る十四万四千人の誕生も象徴している。彼らが天に入ると、彼女はさらに別の子を産むが、それは日曜法の時にバビロンから出てくる別の群れを表している。

彼女は産みの苦しみをする前に産み、その痛みが来る前に男の子を産んだ。こんなことを聞いた者があるか。こんなことを見た者があるか。地が一日にして生み出すことがあるか。一つの国民がたちどころに生まれるだろうか。シオンは産みの苦しみをするとすぐに、その子らを産んだからである。わたしが出産にまで導いておきながら、産ませないだろうか、と主は言われる。わたしが産ませておきながら、胎を閉ざすだろうか、とあなたの神は言われる。イザヤ書66章7-9節。

地の獣が支配する時、一度に一つの国民が生まれる。その国民とは十四万四千人である。彼らはキリストの品性を完全に映し出す者たちだからである。彼らは「男の子」であるイエスにより象徴される者たちであり、女が陣痛を迎える前に生まれるイザヤの「男の子」に当たる。底知れぬ淵から上って来た獣に殺されたとき世界が喜び祝った乾いた骨は、エルサレムで慰められ、その後「男の子」を産む女と共に喜ぶようになる。彼らは彼女が産みの苦しみをする前に生まれ、その後、彼女は産みの苦しみをして、ほかの「子どもたち」を産む。その時、第三の天使のメッセージに異邦人が流れる川のように応答し、そのメッセージは大波のように地を席卷する。彼らは大いなる危機の中で生まれ、それが彼女の産みの苦しみを表している。黙示録十二章の女は、本質的には双子を宿している。長子は初穂とされる十四万四千人であり、異邦人は夏の収穫の大いなる取り入れである。

エルサレムとともに喜び、彼女を愛するすべての者よ。彼女のために嘆くすべての者よ、彼女とともに大いに喜び樂しめ。あなたがたがその慰めの乳房に吸いついて満ち足り、彼女の栄光の豊かさを絞り出して喜ぶために。主はこう言われる。見よ、わたしは彼女に川のように平和を行き渡らせ、ほとぼしる流れのように異邦人の栄光をもたらす。そのとき、あなたがたは乳を吸い、彼女の脇に抱かれて運ばれ、膝の上であやされる。母がその子を慰めるように、わたしはあなたがたを慰める。あなたがたはエルサレムで慰められる。これを見ると、あなたがたの心は喜び、骨は草のように栄える。主の御手はそのしもべたちに知られ、御怒りはその敵に向かう。イザヤ 66:10-14。

エルサレムのために「嘆く」者たちとは、その中で行われている忌むべき行いのゆえに嘆き、泣き叫ぶ者たちであり、日曜法に先立って印を受けている者たちである。私たちは今、教会のための「締めくくりの働き」の中にあり、すなわち、十四万四千人が印を受ける働きの最終局面にある。

主の働きと魂の救いの精神を心に抱く神の真の民は、常に罪をその真の罪深い性質として見るであろう。彼らは、神の民に容易にまとわりつく罪に対して、忠実かつ率直に対処する側にいつも立つ。とりわけ教会に対する最後の働き、すなわち神の御座の前で非のない者として立つことになる十四万四千人の封印の時には、彼らは神を名の民の不正を最も深く痛感するであろう。これは、各々が手に殺戮の武器を持つ者たちの姿という象徴のもとに最後の働きを示した預言者の描写によって、力強く示されている。その中に一人、亜麻布をまとい、腰に書記の筆入れを帯びた者がいた。「主は彼に言われた。『この都の中、エルサレムのただ中を通り、その中で行われているすべての忌むべきことのために嘆き叫ぶ者たちの額に、しるしを付けよ。』」Testimonies, volume 3, 266.

「嘆き叫ぶ」者たちは、屠りの武器を携えた滅びの天使たちが、エルサレムとして象徴されている教会を通り抜ける前に、印を付けられる。

「その命令はこうである。『町のただ中、エルサレムのただ中を通って行き、その中で行われているすべての忌むべきことのゆえに嘆き、叫ぶ者たちの額に印を付けよ。』この嘆き、叫ぶ者たちは、いのちの言葉を語り伝えてきた。彼らは戒め、諭し、懇願した。神の名を汚していた者たちの中には、悔い改めて御前に心を低くした者もいた。しかし主の栄光はイスラエルから去っていた。多くの者がなおも宗教の形式を続けてはいたが、主の力と御臨在は欠けていた。」

御怒りが裁きとして下される時、キリストに謙遜に、献身的に従う者たちは、嘆きと涙、戒めと警告となって表れる魂の苦悩によって、世の他の人々と区別されるであろう。ほかの者たちが現にある悪を覆い隠し、至る所にはびこる大いなる邪悪を正当化しようとする一方で、神の栄誉のための熱心と魂への愛を持つ者たちは、誰の歓心を買うためにも沈黙を守ることはない。彼らの義なる魂は、不義なる者の不敬虔な業と言動によって日ごとに悩まされている。押し寄せる不義の濁流を食い止める力はなく、ゆえに悲嘆と恐れで満たされる。大いなる光を与えられてきた人々の家庭そのものにおいて信仰が軽んじられているのを見て、彼らは神の前に嘆く。教会の中に高慢、貪欲、利己、そしてほとんどあらゆる種類の欺きがあるゆえに、彼らは嘆き、自らの魂を苦しめる。戒めへと促す神の御霊は踏みにじられ、その間にサタンのしもべたちは勝ち誇る。神は辱められ、真理は無効にされている。

自分自身の霊的な衰退を悲しまず、他者の罪をも嘆かない者たちは、神の印を受けることなく取り残されるであろう。主は、手に殺戮の武器を持つご自分の使者たちに命じられる。「彼の後に従って町の中を行き、撃て。容赦するな、また憐れむな。老人も若者も、処女も幼子も女も、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」そこで彼らは、家の前にいた古老たちから始めた。

ここで私たちは、教会—主の聖所—が、まず神の怒りの打撃を受けたことを見る。神から大いなる光を与えられ、民の霊的利益の守護者として立っていた長老たちは、その委ねられた務めを裏切っていた。彼らは、もはや昔のように奇跡や神の力の顕著な現れを求める必要はない、という立場を取っていた。時代は変わったのだ、と。これらの言葉は彼らの不信を強め、こう言う。「主は善もなさらず、悪もなさない。主はあまりにもあわれみ深く、ご自分の民に裁きをもって臨まれることはないのだ」と。こうして、「平和だ、安全だ」という叫びが、もはや二度とラッパのように声を上げて神の民にその背きとヤコブの家にその罪を示すことのない人々から発せられる。吠えない口のきけない犬どもこそ、侮られた神の正当な報復を受ける者たちである。男たちも、乙女も、幼子も、皆ともに滅びる。『証言』第5巻、210、211頁。

イザヤ書四十章は、二重化という象徴を用いることから始まるが、これは、バビロンの陥落のメッセージと結びつく第二のメッセージである「真夜中の叫び」のメッセージの予言的標識である。バビロンの陥落は、予言的に表現されるとき二重にされる。語句は「バビロンは倒れた、倒れた」である。

また、別の天使が続いて来て、こう言った。「大いなる都バビロンは倒れた、倒れた。彼女はその不品行による怒りのぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませたからである。」黙示録 14:8。

文字どおりのバビロンには聖書に記された二度の陥落があり、霊的なバビロンにも聖書に記された二度の陥落がある。これらを合わせると、バビロンの陥落の予言的特徴を明らかにする四つの歴史的証言となる。

彼は力ある大声で叫び、こう言った。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。悪霊どもの住まいとなり、あらゆる汚れた霊の巣窟となり、すべての汚れた憎むべき鳥の檻となった。」ヨハネの黙示録 18:2。

文字通りのバビロンは、ニムロデの時代にはバベルとして滅び、ベルシャツアルの時代にもまた滅びた。霊的バビロンは1798年に滅び、その最終的な滅びは聖書の中で繰り返し示されている。このため、バビロンの滅びのメッセージには二重化という予言的象徴が含まれている。バビロンの滅びには二重化が伴うが、この二重化という現象には、ほかにも主要な予言的理由が二つある。

第二の理由は、それが一つのメッセージとして、第二のメッセージと結び合わされたメッセージを表しているということです。すなわち、それは二つのメッセージを表しています。第二の天使のメッセージの意味と構造には他にも重要な真理がありますが、ここでは単に、イザヤ書四十章から始まるイザヤの最後の予言的叙述が、キリストが天の聖所にとどまっておられる間にご自分の民に与えると約束された慰め主の象徴の重複から始まっていることを指摘しておきます。

慰めよ、慰めよ、わが民を、とあなたがたの神は言われる。エルサレムの心に語りかけ、彼女に告げよ。その苦役は終わり、その咎は赦された。主の御手から、そのすべての罪のために二倍の報いを受けたからである。イザヤ書 40:1、2。

聖書の中で、「アルファでありオメガ」であるというキリストの御性質について、イザヤ書四十章から巻末までの箇所ほど具体的に語っているところはほかにない。アルファでありオメガである方として、キリストはこの箇所にご自身の名「アルファでありオメガ」の署名を記しておられる。というのも、イザヤ書の終わりに至ると、彼は再び慰め主に言及しているからである。キリストはことばであり、初めであり終わりである。

主はこう言われる。天はわたしの王座、地はわたしの足台である。あなたがたがわたしのために建てる家はどこにあるのか。わたしの憩う場所はどこか。これらすべてはわたしの手が造り、こうしてこれらはみな存在するようになった、と主は言われる。しかし、わたしが顧みるのはこのような人、すなわち貧しく、打ち碎かれた霊を持ち、わたしの言葉におののく者である。牛をほふる者は人を打ち殺す者に等しく、小羊をささげる者は犬の首を折る者に等しく、供え物をささげる者は豚の血をささげる者に等しく、香をたく者は偶像を祝福する者に等しい。まことに、彼らは自分の道を選び、その魂は彼らの忌むべきことを喜んでいる。わたしもまた彼らの迷いを選び、彼らの恐れているものを彼らにもたらず。わたしが呼んだとき、だれも答えず、わたしが語ったとき、彼らは聞かなかったからである。むしろ、彼らはわたしの目の前で悪を行い、わたしの喜ばないことを選んだ。イザヤ書 66:1-4

神の民は神のためにどのような家を建てたのか、という問いが提起される。彼らはペテロの言う霊的な家を建て上げたのか、それともサタンの会堂を建て上げたのか。神は、ご自身が建てられた家は、「貧しく、碎かれた霊」を持つ者と、神の「ことば」に「おののく」者たちから成っていると明らかにしている。神はまた、ご自分のことばにおののく者たちと、自分の道を選び、汚れた供え物をささげる別の一群とを対比している。汚れた供え物をささげるその一群は、ユダヤ人がそうであったように、自分たちの家が荒れ果てたまま彼らに残されることを知ることになる。

すべての預言者は世の終わりについて語っており、これは、御言葉におののく知恵ある者と、自分の魂の喜ぶ忌むべきものを神にささげている愚かな者との違いを示す一つの例証である。このゆえに、神は愚かなラオデキヤの乙女たちに与える惑わしをお選びになるが、それは、使徒パウロが「偽り」を受け入れたことのゆえにもたらされると指摘する、その惑わしである。

「偽り」はアドベンチズムの歴史における特定の象徴であり、それは1863年に建設者たちに受け入れられ、その後のアドベンチズムの歴史を通してその上に築き上げられてきた。それは偽の土台を生み出した偽りであり、彼らはそこで偽りの模造神殿を築き始めた。真の神殿を偽造する彼らの働きは「終わりの日々」まで続く。イザヤは六十六章の文脈を、賢いおとめと愚かなおとめの分離の中に置いている。イザヤは、イザヤ書四十章一節で示した預言の歴史を特定しており、その時、キリストは2020年7月18日の失望の後、象徴的な三日半のちに慰め主を遣わすと約束された。

主の言葉におののく者よ、主の言葉を聞け。あなたがたを憎み、わたしの名のためにあなたがたを追い出した兄弟たちは、「主があがめられるように」と言った。しかし、主はあなたがたの喜びのために現れ、彼らは恥を見る。町からの騒ぎの声、宮からの声、敵に報いを返される主の声。イザヤ書 66章5、6節。

1798年から1844年にかけて、ミラー派の運動の中で、主は霊的な神殿を建てられた。主は契約の使者として1844年にその神殿に突然来られた。主はまた、十四万四千人の運動において霊的な神殿を建てておられる。それは、その神殿に突然来て、その神殿と契約を結ぶためである。ペテロは第一の手紙二章で、その神殿を「霊の家」と呼んでいる。「主の言葉を聞く者たち」とは、ヨハネが黙示録で、聞く者は「幸い」とであると言うときに指している人々である。彼らは旗印である。というのも、その旗印は「イスラエルの追いやられた者たち」から成っているからである。愚かなラオデキヤ人は、主が、その御言葉におののくフィラデルフィア人のうちにご自身の栄光を現されるとき、恥を見るだろう。そして、その御言葉は「真理」である。

賢い者と愚かな者が他の階級から区別されている期間に聞こえる三つの声は、「都」から、「神殿」から、そして「報いを施す主」から来る。都からの最初の「声」は「どよめき」であり、その「どよめき」とは、突然やって来る慰め主の到来である。

五旬節の日が来たとき、彼らは皆、心を一つにして一つ所にいた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような音がして、彼らが座っていた家全体を満たした。また、炎のような分かれた舌が彼らに現れ、それぞれの上にとどまった。使徒の働き 2:1-3。

使徒の働き2章2節で「音」と訳されている語は、「騒ぎ」や「うわさ」を意味する。「うわさ」とは預言である。「都」から来る「音」または「騒ぎ」は、「力強い風」によって表されている。「都からの騒ぎの声」は、イスラムの「うわさ」、すなわち、霊的にはソドムおよびエジプトと呼ばれ、私たちの主もそこで十字架につけられた「大なる都の大通り」で殺された者たちの乾いた骨の谷における慰め主の到来を示す預言的メッセージである。

イザヤ書40章で、「契約の使者」のために道を備えることになっていた「声」は、何を「叫べ」ばよいのかと尋ねた。すると、その「声」には「イスラムのメッセージを叫べ」と告げられた。使徒の働きでは、ペテロの霊的な「家」を満たした「響き」は「激しく吹く力強い風」であり、それはエゼキエル書37章ではイスラムの四方の風から来たものであった。

都からの騒ぎの声、宮からの声、主の敵に報いを返される主の声。イザヤ書 66:6

わたしたちの主が十字架につけられたその通りから、慰め主はまず、荒野で叫ぶ者の「声」に、そのメッセージが何であるべきかを知らせる。ついで、1798年から1844年にかけての初期の運動に象徴される、建て上げられた神殿である強大な軍勢が、その叫びをさらに高める。イスラムの叫びを告げるその強大な軍勢の運動は、日曜法の可決に対するアメリカ合衆国への裁きを告げる神の声を明らかにする第三の「声」へと導く。主が報いを返されるのはまさにそこである。この三つの声は、「七つの雷」の隠された歴史という構造のもとに統御されており、それは、「驚くべき言語学者」によって作られ、「真理」

と訳されるヘブライ語の語の語頭・中間・語尾の文字を表している。こんなこと、作り上げられるはずがない！

これまで私たちが明らかにしてきた預言的歴史と一致して、イザヤは次に一つの国家の誕生を取り上げる。

彼女は産みの苦しみをする前に産み、その痛みが来る前に男の子を産んだ。こんなことを聞いた者があるか。こんなことを見た者があるか。地が一日にして生み出すことがあろうか。一つの国民がたちどころに生まれるだろうか。シオンは産みの苦しみをするとすぐに、その子らを産んだからである。わたしが出産にまで導いておきながら、産ませないだろうか、と主は言われる。わたしが産ませておきながら、胎を閉ざすだろうか、とあなたの神は言われる。イザヤ書66章7-9節。

女が産みの苦しみをする前に生まれる国は、つい最近、街路に横たわり、死に絶えて乾ききっていたが、全世界はその境遇を喜んでいた。だが、二人の証人が立ち上がると、彼らの死を喜んでいた者たちは恐れた。殺され、死に絶え乾ききった屍が一つの国として立ち上がる時、エルサレムを愛するすべての者はそのとき彼女とともに喜ぶだろう。エルサレムを愛する者には、十四万四千の民からなる国だけでなく、そのときバビロンから呼び出される神のもう一つの群れも含まれる。2020年7月18日の失望からの復活は、慰め主の到来によって成し遂げられる。それによって、死に乾いた「骨」は「草のように栄える」。

エルサレムとともに喜べ、彼女を愛するすべての者よ。彼女のために嘆くすべての者よ、彼女とともに大いに喜び樂しめ。あなたがたがその慰めの乳房に吸いついて満ち足り、彼女の栄光の豊かさを絞り出して喜ぶために、主はこう言われる。見よ、わたしは彼女に川のように平和を行き渡らせ、ほとぼしる流れのように異邦人の栄光をもたらす。そのとき、あなたがたは乳を吸い、彼女の脇に抱かれて運ばれ、膝の上であやされる。母がその子を慰めるように、わたしはあなたがたを慰める。あなたがたはエルサレムで慰められる。これを見ると、あなたがたの心は喜び、骨は草のように栄える。主の御手はそのしもべたちに知られ、御怒りはその敵に向かう。イザヤ 66:10-14。

アルファでありオメガである方は、慰め主の到来を指し示しつつ、イザヤの最後の叙述の終わりを、まさに最初に始まったその場所へと戻す。そしていつもそうであるように、エリヤのメッセージを表すすべてのメッセージは、主が呪いをもって地を打つという文脈の中に置かれている。

見よ、主は火をもって来られ、その戦車はつむじ風のように、激しい怒りをもって報い、火の炎をもって懲らしめを下される。主は火とその剣によって、すべての肉なる者を裁かれ、主に打ち殺される者は多い。園の中で、園の真中にある一本の木の後ろで、自らを聖別し身を清め、豚の肉と忌むべきものと鼠を食べる者たちは、皆ともども滅ぼし尽くされる、と主は言われる。わたしは彼らの行いとその思いを知っている。時が来れば、わたしはすべての国々と諸言語の民を集める。彼らは来て、わたしの栄光を見るであろう。イザヤ書 66:15-18

エデンの『園』の『真ん中』にある『善悪の知識の木』の陰に隠れている愚かなラオデキヤ的アドベンチストは、実はバビロンの汚れた教理を飲み込んでいながら、自分たち

を聖め清めていると公言し、あまりにも手放しがたいほど愛している罪のゆえに、アダムとエバがそうしたように身を隠している。彼らはほかのすべての国々とともに焼き尽くされる。彼らは、『しるし』となる賢い者たちと対比される。その『しるし』とは『旗印』であり、それは安息日を表している。安息日は、実際にご自分の民を聖めるあなたの神、主のしるしである。

それゆえ、イスラエルの子らは安息日を守り、代々にわたってそれを守り行い、永遠の契約とする。これは、とこしえに、わたしとイスラエルの子らとの間のしるしである。主は六日のうちに天と地を造り、七日目に休み、いこわれたからである。出エジプト記 31:16、17

賢い者たちは、信仰告白の木陰に身を隠してはいない。彼らは旗印として高く掲げられ、大いなる争いの最後の場面において神の栄光をあらわしている。神の栄光とは神の品性であり、彼らが世界に示すその品性の要素は、アルファでありオメガ、初めであり終わり、最初であり最後である「真理」として表されている。

わたしは彼らの中に一つのしるしを立て、彼らのうちの逃れた者たちを、タルシシュ、プル、弓を引くルド、トバル、ヤワン、そしてわたしの名声を聞かず、わたしの栄光を見たことのない遠く離れた島々など、諸国の民のもとへ遣わす。彼らは異邦人の間でわたしの栄光を告げ知らせる。そして彼らは、馬に乗せ、戦車や輿に載せ、らばや速い獣に乗せて、あらゆる国々からあなたがたのすべての兄弟を、主への供え物として、わたしの聖なる山エルサレムへ連れて来る、と主は言われる。ちょうどイスラエルの子らが清い器に供え物を入れて主の家に携えるように。またわたしは彼らのうちから祭司とレビ人をも取る、と主は言われる。わたしが造る新しい天と新しい地がわたしの前にとこしえに存続するように、あなたがたの子孫も、その名も、とこしえに存続すると主は言われる。新月から新月へ、安息日から安息日へ、すべての肉なる者はわたしの前に来て礼拝するようになる、と主は言われる。彼らは出て行き、わたしに背いた者たちの死体を眺める。彼らのうじは死ぬことがなく、その火は消されることがない。彼らはすべての肉なる者にとって忌み嫌われるものとなる。イザヤ書 66:16-24

イザヤの最後の預言的物語は、2023年7月の慰め主の到来から始まり、その物語はまさに始まったところで終わる。それは、猶予期間が閉じる直前に封印が解かれる「七つの雷」の隠された歴史の中に現れる。それは、初めにおけるミラー派運動の繰り返しを、終わりにおける十四万四千人の運動の歴史と同一視する。さらにそれは、エリヤのメッセージに伴う呪いのメッセージを、諸国を怒らせるイスラムの預言的働きメッセージとして表している。主はそれを用いて、日曜法のゆえに「最初に」アメリカ合衆国に、そして同じ反逆のゆえに「最後に」全世界に裁きを下す。

次回の記事でイザヤの最後の物語の考察を続けます。